

「内務省委託本」調査レポート

第16号：ある検閲官の肖像 —内山鑄之吉の場合—

2017年3月(報告/安野一之)
発行:千代田区立千代田図書館

戦前期の日本では、中央官庁の一つであった内務省が出版物の検閲を行っており、全国で出版されたさまざまな本が内務省に納本されていました。1937(昭和12)年頃以降、内務省で検閲業務に用いられた原本の一部が、千代田図書館の前身である駿河台図書館をはじめとする市立図書館4館に委託されることになりました。当館では、これらの資料を「内務省委託本」と呼び、現在約2,300冊が確認されています。

当館の所蔵する「内務省委託本」は、実際に検閲に使用されたもので、内務省の係官が内容をチェックするために引いた赤線・青線、出版の可否についてのコメントなどが残されています。発禁本は含まれていませんが、当時どのように検閲が行われていたのかを知ることができるという点で、出版史上貴重な資料です。当レポートでは、「内務省委託本」の調査研究により明らかとなった新事実について、様々な切り口からご報告いたします。

はじめに — なぜ内山鑄之吉なのか？

戦前の出版検閲を担った内務省警保局図書課には、大きく分けると三つの職階が存在した。一つは高等文官試験に合格し、高等官と呼ばれたエリート官僚である図書課長・事務官。もう一つは今日の一般的な公務員にあたる属官。そして、非正規雇用であった嘱託・雇である。

図書課長や事務官の在任期間は平均して2-3年と短く、彼らは検閲業務のエキスパートというよりは、出版警察行政全般にわたるゼネラリストであった。発売頒布禁止・削除といった行政処分を実際に決定するのは図書課長や事務官であり、彼らには大きな権限が与えられていた。一方、彼らは人数も少なく、日々納本される膨大な数の新聞・雑誌・単行本に目を通すことは物理的に不可能であった。内務省委託本を見ても、図書課長・事務官のコメントが残されているものはほとんど無く、あるとしても押印か、了解の「了」の字だけである。実際にページをめくり、赤鉛筆・青鉛筆を握って検閲を行ったのは属官達だった。属官は図書課に10年以上在籍するものも多く、出版検閲のエキスパートであった。図書課長や事務官は、検閲を行った属官から「問題あり」とされた本を確認し、協議した上で行政処分を下していたのである。

エリート官僚だった課長や事務官が後年になって手記や自伝を残したり、歴史研究者の調査対象になったのに比べ、一般官僚だった属官に関する記録は非常に少ない。出版検閲の実態を研究する上で、実務の中心を担った検閲官＝属官達のことを知ることは不可欠だが、その人物像や経歴を知ることが容易ではなく、これまで彼らが研究対象として取り上げられることはなかった。

●昭和8年の警保局図書課

正規雇用	親任官	内務大臣	1名	「高等官」と呼ばれる エリート官僚 (大臣の一部を除く)
	勅任官	警保局長	1名	
	奏任官	図書課長	1名	
		事務官	2名	
	判任官	属官	25名	一般的な役人
非正規雇用		嘱託	7名	各種専門家 (語学など)
		雇	21名	事務補助

だが、内務省委託本の調査を通し、数多くの属官のコメントや押印に接するうち、彼らに関する様々な情報が蓄積されていった。例えば押印一つを取り上げても、どの時期に誰の印が多いか、どのジャンルの本には誰の印が多いのか。こうした情報は実際に検閲に使われた検閲正本である内務省委託本を総覧しなくては見えてこない。こうした地道な調査を重ねつつ、検閲官達の情報を探し求めた結果、近年になってようやく数人の属官の人物像が掴めるようになってきた。本レポートではそうした属官の一人である内山鑄之吉という人物にフォーカスを当てて論じていきたい。

なお、「検閲官」という呼称は、厳密に言えば昭和 15(1940)年 12 月以降に作られたポスト名であり、それ以前は「検閲係」と呼ぶのが適当であるが、ここでは便宜的に「検閲官」という呼称で統一する。

多数いた検閲官達の中で、なぜ内山鑄之吉に着目したのか。その理由はシンプルで、内務省委託本に捺された「内山」印が非常に多かったからである。内務省委託本の多くは大正末から昭和 10 年代前半に刊行されたものであるが、これは内山が図書課で働いていた期間とほぼ重なる。また、昭和 8(1933)年以降、単行本検閲は基本的に二人体制になるが、多くの場合、ベテラン検閲官と若手がセットになっていた。この時期、検閲係主任となっていた内山は責任者として多くの印を捺すことになったのである。きっかけは単純だったが、調査を重ねるに従って内山という人物の様々な顔が見えてきた。以下、時系列に沿って彼の足跡を辿っていこう。

若き日の内山鑄之吉



人首文庫所蔵

内山鑄之吉は明治 34(1901)年 4 月生まれ。出身は現在の東京都巣鴨。私立京華中学校を経て、熊本の第五高等学校に進学している。高校時代の記録は残されていないので、どんな学生だったか不明だが、第五高等学校の校友会誌である「龍南会雑誌」(177 号、大正 10 年 3 月)に内山の名前が残されている。それによると内山は大正 10 年度龍南会役員であり、雑誌部の委員であったようだ。「龍南会雑誌」の雑誌部は下村湖人や梅崎春生、木下順二など多数の文学者を輩出しており、内山も文学青年だったと推察される。その後、大正 11(1922)年 3 月、第五高等学校第 31 回生として卒業。文科甲類の同期には後に首相となる池田勇人がいた。

内山は同年 4 月に東京帝国大学文学部英文科に入学。翌年の関東大震災の際には、帝大セツルメントに参加することになる。帝大セツルメントとは、今日のボランティア活動の先駆であり、関東大震災の被災者救護活動を目的とした学生救護団を母体とした団体であった。内山がどの段階から、どのように関わっていたのか分からないが、『東京帝国大学セツルメント十二年史』(東京帝国大学セツルメント、昭和 12 年 2 月)所収の名簿によると、「オールドセツラー会員(年代順)」の 6 番目に内山鑄之吉と書かれており、帝大セツルメントの草創期から関わっていたことが確認できる。

当時の東京帝国大学は三年制だったので、大正 14(1925)年 3 月、内山は大学を卒業する。大学時代、内山が文芸部に所属し、文芸部の雑誌「朱門」の同人だったというエピソードも残されているが、文芸部が東京帝国大学に設立されたのはこの年の 2 月であり、「朱門」にも名前が残っていないことから、裏付けを取ることはできなかった。だが、小説家の池谷信三郎や舟橋聖一達とは近しかったようで、そのことが内山の人生を大きく変えることにつながるのである。

内山鑄之吉と心座

内山鑄之吉は大学卒業後、内務省嘱託になるまでの間に約 9 ヶ月の空白がある。この時期、景気が良いとは言えなかったものの、昭和 2(1927)年の昭和金融恐慌はまだ来ていない。東京帝国大学文学部英文学科卒という学歴を考えれば、中学校教員等、就職先に困ることはなかっただろう。この間、内山は何をしていたのだろうか？その答えは思いがけないところから見つかった。

内山は大学卒業後、ある劇団の創設に関わっていたのである。劇団の名前は「心座」。昭和初期の演劇史を語る上で外すことの出来ない劇団の一つである。劇団の創設者の一人である池谷信三郎は当時のことを以下のように回想している。

あの頃、僕は何か新しい劇団を興して、自分たちのドラマトウルギーを直接世に問い度いと考へてゐました。そこへ丁度小山内氏の紹介で高島屋一門の新進河原崎長十郎君と識つたので、一つ初め(ママ)やうぢやないかと云つた具合で、初めは、歌舞伎座の屋上でおそばなんかを食べ乍ら、気楽に話し合つてゐたのですが、それがやり出すと中々色々の面倒な雑務が出て来て、又それだけに気乗りがして来て、伊藤専一、村山知義、内山鑄之吉の諸君、それに俳優の方では長十郎君の友人の市川団次郎君が加はり、愈々九月の廿六、七、八の三日間、築地小劇場で旗揚げという段取りになったのです。

「三月卅二日」の事ども(1927.7)

(『池谷信三郎全集』、昭和 9 年 6 月 20 日、改造社)より

ここに書かれている人物を簡単に整理すると次のようになる。池谷信三郎は当時新進作家として注目されていた人物で内山の同級生。小山内薫は築地小劇場創設で知られる劇作家・演出家。河原崎長十郎は、若手歌舞伎役者。伊藤専一は池谷と同じく「朱門」同人。作家・画家・劇作家・演出家等々、マルチな才能を発揮した村山知義。市川団次郎は、後の第 11 代市川團十郎。小山内を除き、全員が 20 代半ばの才気煥発な若者達であり、内山もその一員だったのである。

「心座」の記念すべき第一回公演は大正 14(1925)年 9 月 26 日～28 日。演目は、「洞」(立川春重作、内山鑄之吉演出)、「三月卅二日」(池谷信三郎作・演出)、「ユアナ」(ゲオルグ・カイザー作、村山知義演出)の三本。幕間には村山知義の舞踊が披露された。

内山にとって演出家デビュー作となった「洞」だが、残念なことに劇評はあまり芳しいものではなかった。

心座を見る—築地小劇場—

…「洞」は一人の美しい娘の愛を得やうがために十人の若人が地に埋もれたと信ぜられた笛を掘り出してゐる洞の内部を舞台にしたもの、作者独特の或る匂ひをうかがへる面白い作だが、演出に未だしの憾がある。

「読売新聞」(朝刊)、大正 14 年 9 月 30 日より

これ以降、内山は表舞台に出ることはなくなり、事務方に徹することになる。だが、団員の入れ替わりが激しかった心座にあって内山は最も長く在籍した一人であり、劇団の運営を考える上で欠かせない人物であった。また、心座における内山の役割を考える上で興味深いエピソードが一つ残されている。



「洞」の舞台裏 ※左から2番目が内山鑄之吉
 郎大河崎山、吉之鑄山内、郎十長崎原河、夫龍内岡（りよ右）

「洞」の舞台裏 ※左から2番目が内山鑄之吉
 「芝居とキネマ」2巻11号(大阪毎日新報社、大正14年11月) 個人蔵

…トラストD・Eが検閲をパスするかどうかと、懸念されて第二案として演出部は直ぐ、オストロフスキーの森林に手をつける。又我々はその稽古を直ちに演る、一方村山君は警視庁へ再三足を運ぶ、同人で内務省に居る内山君まで相変わらず引張り出されて警視庁へ出かける。

市川笑猿「幕内のぞき」

(「心座パンフレット第5号」、昭和4年4月26日)より

当時、内山は既に内務省で働いており出版検閲に携わっていたが、演劇脚本の検閲は内務省ではなく、各府県警察部(東京の場合は警視庁)が行っていた。当時、「トラスト D・E」は検閲を通るか危惧されていたため、村山知義と内山は連れだって警視庁に行っていたらしい。一属官に過ぎなかった内山に横車を押す真似が出来たとは思えないが、一般人が交渉に行くより有利だったことは想像に難くない。

「トラスト D・E」を成功裏に終えた心座だったが、その後は運営方針を一気に左傾化させていき、内山を含む過半数の団員は退団してしまう。村山知義はこの方針転換について以下のように語っているが、結果的には「トラスト D・E」の次の公演後、心座は解散してしまう。

心座が自らをはっきりプロレタリア専門劇団として意識し、内部の組織を改め、新興劇団協議会に加盟し、経営の点でも従来の観客と別の層を観客として持ち得るような、大きな冒険を敢えてしたというような諸点に於いてである。

村山知義「一言」

(「第11回心座公演パンフレット」、昭和4年10月27日)より

心座に集った才能豊かな若者達は、後年、著名な演劇人・俳優・作家などに育っていった。そのため、心座の評価は彼らを軸に据えたものが多く、裏方として劇団を支え続けた内山鑄之吉に言及した論文は存在しない。

内務省警保局図書課時代の内山鑄之吉

大学を卒業し、心座の創設に関わり、初公演を終えた後。大正15(1926)年1月、内山は内務省警保局図書課に嘱託として雇われることになる。どのような経緯で嘱託になったのか全く分からないが、少し遅れて入った佐伯慎一(郁郎)の回想から当時の様子をうかがい知ることが出来る。

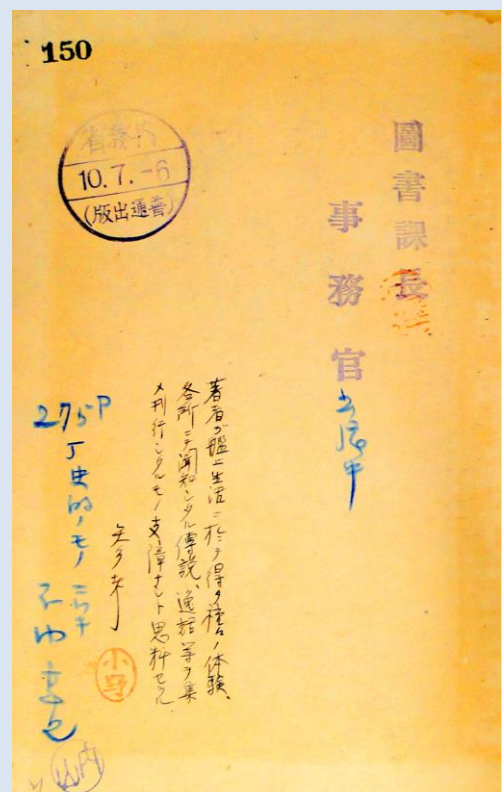
…警察学校の優秀な連中が検閲にあたっていたのが、けしからんじゃないかとネジ込まれて、文科を出たのを二人採用して、私が「現代」の担当、東大を出たのが「クラシック」ということで文学の方を担当させられたんですね。

ところが二年ぐらいたら、われわれは二人とも検閲係から調査係へ回されたんです。文科を出た奴を採ってはみたけど、ここは何も文学を鑑賞したり理解したりするところじゃない、と言うんだ。「一般国民が読んで困るようなものを出させないようにするのがこの仕事だ、君たちみたいに理解したり鑑賞したりする必要はない、まあ、日本の出版動向の調査でもしてくれたまえ」と、二人とも二階に上げられちゃった。

『体験的児童文化史』(滑川道夫著、国土社、平成5年8月)より

ここに書かれている東大の文科を出た人物が内山であり、佐伯よりも11ヶ月前に図書課の嘱託になっていた。この後、佐伯は調査係を長く続けることになるが、内山は早い段階で検閲係に戻されたようだ。

内山は昭和3(1928)年8月、正規雇用である属官になり、昭和8(1933)年4月、図書出版検閲係主任となる。既に述べたように検閲係主任となった内山の押印は多く残されているが、コメントが残されている本は必ずしも多くない。基本的に部下が通読し、赤線を引き、コメント残した検閲正本を内山が確認し、必要に応じて青線を引くという役割分担が行われていたようである。また、些細なことだが、「不問意見」と書くところを「不門意見」と書くのは内山の書き癖である。



内山による検閲の痕跡が残る書籍(見返し)

『航海風景』学而書院、昭和10年 千代田図書館蔵「内務省委託本」

高等官への道

図書課の検閲主任となった内山だったが、昭和 14(1939)年 6 月、思わぬ形で新たな道が開けることになる。それは昭和 12(1937)年 10 月に発足した企画院の調査官というポストであった。この時の辞令を見ると、内山は「思想調査に関する企画院調査官」と言うことで「敍高等官七等、九級俸下賜、企画院第二部勤務を命ず」となっている。この辞令の直後には内閣情報部情報官兼務の辞令が下り、以後、内山は企画院調査官と内閣情報部情報官の肩書きを持つようになる。当時、専門知識を持った属官を高等官に任用する制度があり、内山も高等試験委員の選考を経て高等官になれたのである。

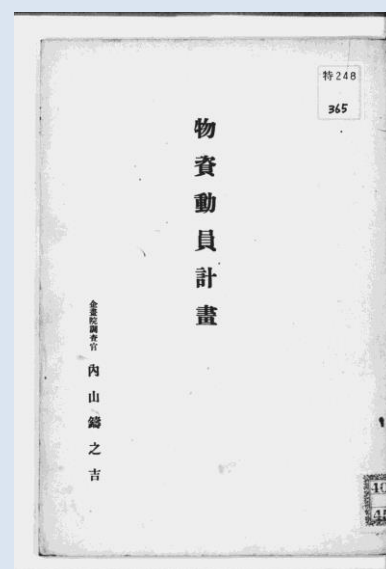
戦時体制になり、企画院や内閣情報部、少し後には情報局などが出来ると、新しい仕事、新しいポストが創設されるため、旧来の役所によるポスト獲得競争が起きるのは常だったが、図書課の属官で企画院に異動したのは内山だった。なぜ内山が引き抜かれたのか？これは推論に過ぎないが、内山のように回り道せず官僚になった第五高等学校や帝大セツルメントの仲間達は既に中堅官僚になっており、そうしたネットワークが役に立ったのかも知れない。この異動は後の内山のキャリアパスを考える上で大きな意味を持つことになる。

戦時下の足跡

内山が配属された企画院第二部の業務は「調査部・生産力拡充関係事務」であった。この頃の内山の仕事として、「物資動員計画」という講演録がある。物資動員計画とは戦時体制を乗り切るために企画院が立案した計画で、軍需を優先し、民需を抑制するものだった。内山の講演は一般人向けに、昭和 14 年度物資動員計画を解説し、彼らの不安を払拭すると同時に、無駄遣いを減らし、国策への協力を呼びかけるものであった。

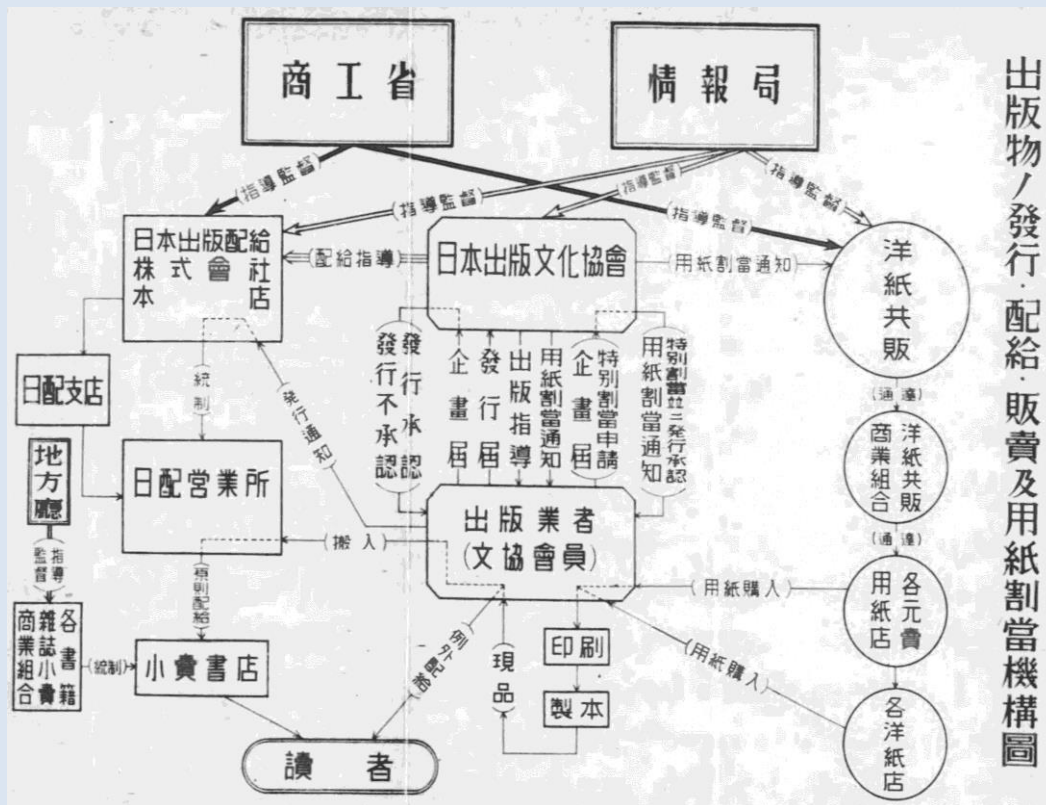
改めて言うまでもなく、戦時下の物資統制は金属や燃料類だけでなく、様々な物品に及んだ。昭和 15(1940)年 5 月に新聞雑誌用紙統制委員会幹事を命じられたのは、出版検閲畑をずっと歩んできた内山が適任だったからだろう。この委員会は用紙の統制を一元的に行う権限を持ち、内務省の出版検閲とは違う形の言論統制を行うことになる。

内山はその後、昭和 16(1941)年 1 月に日本出版文化協会文化委員に就任する。「文化委員」が具体的に何をしたのか分からないが、日本出版文化協会は出版物の発行・用紙の割り当ての中心に位置し、これまでに類を見ない強力な言論統制機関として機能した。内山は情報局情報官という立場でこの組織に関わっていたのだ。日本出版文化協会はその後、日本出版会に改組されるが、そこに内山の名前は確認出来なかった。



内山による講演録

『国家総動員経済講話』(大阪商工会議所編、一元社、昭和 15 年 2 月)
国立国会図書館所蔵



日本出版文化協会と出版物の発行・用紙割り当て
『書籍年鑑 昭和 17 年版』(協同出版社、昭和 17 年)より
国立国会図書館所蔵

昭和 18(1943)年 11 月、企画院と商工省が合併し、軍需省になったのに伴い、内山の身分は軍需官となる(配属は軍需大臣官房文書課)。その翌年、昭和 19(1944)年 7 月、内山は軍需省を辞め、役人生活に終止符を打つ。しかし、これはリタイアを意味するのではなく、統制会社に再編された日配(正式名称は日本出版配給統制株式会社)の理事兼業務部長に就任するためであった。内山は理事就任にあたり次のような言葉を残している。

前日配が発足致しました当時、私は情報局に職を奉じて居りまして、微力ながらお手伝いしたことがあります。それ故今回入社に際しまして、所謂役人が天降ったという気持ちではなく、親類の家に行くような極く親しい気持ちで参った次第です。しかし何分配給の事務につきましては、全然素人でございますから、今後皆様の御指導によりまして、大過なきよう努力してまいりたいと思います。皆様の御協力を切にお願いいたして止まぬものであります。

「出版弘報」44 号(日本出版配給、昭和 19 年 9 月)より

既に述べたように、内山は戦時下の出版統制に深く関わっており、「親類の家に行くような極く親しい気持ちで参った次第です」という言葉は確かにその通りだろう。一方で、「配給の事務につきましては、全然素人」というのはいささか謙遜が過ぎるのではないだろうか。

内山がいつまで日配の理事を勤めていたのか、確たる証拠はないが、金井英一の『日本出版会日誌 昭和 20 年 6 月 4 日-10 月 10 日』(金井弘夫、平成 26 年)には、昭和 20(1945)年 9 月まで内山の名前が記されていることから考えると、同年 10 月の改組まで勤めていた可能性が高いと考えられる。

もう一つの顔

ここまで戦時下の内山の足跡を追ってきたが、この時期の内山には役人としての顔の他に、もう一つの顔があった。それは子弟の教育に熱心な父親としての顔であり、私立学校の父兄会会長（後に理事長）としての顔であった。

内山が創設に関わった学校の名前は、藤沢市鵜沼にあった私立爽明学園。氏原佐蔵らによって創設された幼稚園・小学校であった。関東大震災以後、東京への通勤圏にあった鵜沼は別荘地から郊外都市として変貌しつつあり、特に昭和 4(1929)年に小田急江ノ島線藤沢駅開業後は、その傾向が強まったと言う。だが、そのような土地の常として子弟教育をどのようにするのか親にとっては頭の痛い問題だったという。

氏原佐助は明治 17(1884)年生まれ。京都帝国大学医学部を卒業後、病院勤務を経て内務技官兼防疫官となっている。内山とは年齢的にもキャリア的にもかなり離れているが、鵜沼から大手町の内務省までの通勤途中に知り合ったのだろうか、内山は学校創立に協力することになる。昭和 6(1932)年 3 月に文部省の認可を得て開校した学校は、しかし、その年の 6 月に氏原が急逝したことで頓挫してしまう。その後、少々複雑な経緯をたどり、玉川学園の創立者として知られる小原国芳の協力を得て、爽明学園は湘南学園と名前を変えて再出発することになる。『湘南学園 三十年の歩み』に寄せられた内山の回想によると、戦中の湘南学園は軍需工場であった東京螺子の松本源三郎が経営を支えていたが、終戦後、東京螺子は接收か閉鎖かという状況に追い込まれたという。そんな折、「湘南学園を父兄が経営するならば提供しよう。もしやらないならば市に寄付しよう」という松本の申出を受け、父兄会長だった内山は寄付金募集を始め、昭和 21(1946)年 5 月に財団法人を組織して土地建物を譲渡してもらう。

内山は湘南学園財団法人設立認可に伴い、父母会長を退任し理事長に就任する。この時のことを振り返り小原国芳は「私が種まきで、あなた(内山)が中興の祖ですよ」と評している。内山は理事長を 1 年で退いた後も、理事を勤め、その後は事務職員として昭和 42(1967)年まで同校に関わり続けたという。

終わりに

冒頭にも書いたが、出版検閲の現場を担った属官に関する情報は少ない。だが、「内務省委託本」調査レポート第 12 号の安田新井、第 15 号の佐伯慎一(郁郎)、そして本号の内山鑄之吉と、彼らの足跡は徐々に明らかになりつつある。

若き日の内山鑄之吉の周囲には村山知義や池谷信三郎、舟橋聖一といった才能豊かな仲間が集っていた。検閲官の道を選んだことで、内山に脚光が当たることはなくなったが、彼らとの関係が切れた訳ではなかった。検閲官でありながら、左傾化していく心座に在籍し続けただけでなく、村山知義と連れだって警視庁に行くのは相当な覚悟が必要だったと思われる(村山は翌年 5 月に治安維持法違反で逮捕されている)。内山がこの時代のことを書き残してくれれば面白かっただろうに、と思うのだが、残念なことに何も残されていない。

内山に限らず検閲官のほとんどは寡黙であり、証言を残していない。戦後になって語られた検閲官像の多くが、弾圧を受けた人々の証言であり、負のイメージが再生産され続けてきた。検閲官個人に焦点を当て、生身の人間としての検閲官像を再定義することは、出版検閲研究に新たな視座をもたらすことになるだろう。

---Written by-----

安野一之 1970年生

國學院大學大学院博士後期課程単位取得満期退学。国文学研究資料館COE研究員、国際日本文化研究センター技術補佐員など。現在、早稲田大学政治経済学部現代政治経済研究所研究協力者。2007年から「内務省委託本」の調査・研究に取り組んでいる。

千代田図書館蔵「内務省委託本」のご利用について

- 「内務省委託本」は閉架書庫に保管しており、事前に申請いただければ、どなたでも閲覧・撮影いただけます。
- 検索には、千代田図書館ホームページから「内務省委託本検索システム」、もしくは『千代田図書館蔵「内務省委託本」関係資料集』掲載の目録をご利用ください。（OPAC、Web-OPACには対応していません）
- 詳しくは図書館職員までお問い合わせください。

発行：千代田図書館「内務省委託本」研究会 ※本資料内容の無断転載はご遠慮ください。

お問い合わせ：千代田図書館・企画「内務省委託本」担当 電話 03-5211-4290